コプトの美術

古代文明発祥の地として知られるエジプトには今日数多くの文化遺産が残されています。紀元2世紀ごろ、地中海世界に広まりつつあったキリスト教は、当時ローマ帝国の支配下にあったこの地方にも浸透し、キリスト教への改宗が進みました。コプトとはキリスト教徒であるエジプト人をさして用いられる呼称で、今回陳列される衣裳などの染織や建築装飾の一部などが伝えられています。コプト裂(ぎれ)は主としてナイル川の流域の墳墓から出土した、チュニックといわれる貫頭衣の装飾の一部などからなるものです。ローマ、ビザンティン、イスラムと変化する支配者の影響下で独自に築きあげられたキリスト教文化の一面を如実に示すものとして、今日貴重な価値をもつものです。